

## 研究ノート 陳大悲とアマチュア演劇

著者	鈴木 直子
著者別名	SUZUKI Naoko
雑誌名	中国文化：研究と教育
巻	70
ページ	L39-L46
発行年	2012-06-23
URL	<a href="http://doi.org/10.15068/00150758">http://doi.org/10.15068/00150758</a>

# 陳大悲とアマチュア演劇

鈴木直子

## はじめに

陳大悲（1887.6.15-1944.8.19）は1910年代後半から「愛美劇（アマチュア演劇）」を提唱し、中国初の近代演劇の教育機関である北京人芸戲劇専門学校を創設した人物として知られている。五四時期にはアマチュア演劇である学生演劇が北京で活発となったが、それは五四以前の職業演劇である文明戯が墮落し、商業演劇への批判が高まったこと、五四により新劇の創生を求める動きが活発化したことによる。職業演劇は商業性を追求せねばならず、それが墮落の原因とされ批判を受けた。陳のアマチュア演劇の提唱と実践は、北方の学校における演劇教育の先駆ともなる活動であり、話劇における演劇教育が学校という枠組みの中に取り込まれアマチュア化していく過程を知る重要な手がかりでもある。

中国でのアマチュア演劇に関しては、提唱者の陳大悲以外に語られることはなく、陳大悲という人物についてもアマチュア演劇を提唱した1920年代以降はあまり知られていない。中国話劇史におけるアマチュア演劇は、北方においては学生演劇として発展し、後にそれは專業性の高い演劇教育機関に統合されていく。本稿では、中国でのアマチュア演劇論がなぜ台頭してきたのか、またその後アマチュア演劇が学校演劇と関連しながらどのように進展していくのかという問題について考察するため、まず陳により提唱されたアマチュア演劇の誕生する経緯を辿り、アマチュア演劇と五四運動時期に活発であった学生演劇活動との関連性を指摘したい。

## 1. 五四運動までの陳大悲の活動

陳大悲は本名を陳聽弈といい、筆名に大悲、蝸公などがある。陳に関する先行研究には『陳大悲研究資料』（韓日新編 中国戲劇出版社 1985年）があり、これを基に陳の経歴を追ってみたい。

出身は浙江省杭県で、祖父は上海租界の承審員<sup>(1)</sup>、父は上海県長であり裕

福な家庭に育った。1908年には蘇州の東呉大学に入学する。この時期に文明戯を知り校内で演劇活動を開始するが両親の反対に遭い、1911年には家庭や大学を離れ上海で任天知の率いる文明戯団体進化団に加入し文明戯俳優となる。1912年に紹興戲院で『武昌蜂起』や『黒奴籲天録』を上演し“天下第一悲旦”の称号を得、また長編の『中国戲劇界と西洋戲劇界』を新聞に発表した。1912年秋に進化団が解散すると、長江流域で文明戯を上演し1914年に『浪子回頭』を、1916年に『美人剣新劇』を創作した。1918年に演劇の勉強のため日本に渡り1919年春に帰国。北京で蒲伯英<sup>(2)</sup>と知り合う。この時期北京の大学などで演劇を教える。1921年5月には沈雁冰、徐半梅、歐陽予倩、鄭振鐸、汪仲賢、熊仏西らと民衆戲劇社を組織した。アマチュア演劇を提唱し、「愛美的戲劇（アマチュア演劇）」を『農報』に連載<sup>(3)</sup>。1921年には李健吾、陳晴臬らと北京実験戲劇社を組織し、1922年に蒲伯英と共に民衆戲劇社を母体とする新中華戲劇協社を立ち上げる。同年冬に人芸戲劇専門学校を創設し、教務主任となったが、翌年解散。この学校の失敗により以後劇作や翻訳などをし、1928年には南京国民政府外交部亞洲司科長となっている。1930年に外交部を離れ小説の執筆などを行い、1935年には潘公展の率いる上海劇院樂劇研究所副所長となる<sup>(4)</sup>。1936年夏には南京で新華劇社を組織するが再び上海に戻り映画創作へと転じた<sup>(5)</sup>。30年代の主な活動として他に“観音戯”というラジオ劇を始めたことを挙げておく。1936年から1937年の間、陳大悲が没落したという記事が目立ち<sup>(6)</sup>、演劇界や映画界での居場所を無くしつつあった陳にとってラジオ劇が唯一の活動の場となった。1940年には再び外交部に戻り、後に武漢で中日文化協会湖北分会第五組主任幹部となり、演劇、映画、歌曲などに携わる活動を行った。1944年に病死（一説に毒殺とも）している。陳の経歴の中で、詳細が不明なのが「演劇の研究のため日本留学（1918年-1919年春）」という期間である。日本には一年ほど滞在したというが、その間の足跡は掴めない。帰国後の1919年に日本人の文章を二篇翻訳しており、それを上海の新聞に掲載している。その二篇が桑木啟翼（1874-1946）作『解放的哲学』（1919年8月訳、上海『民国日報』副刊8月29日-9月4日連載）と佐野学（1892-1953）作『労働者運動之指導原理』（1919年9月訳、『觉悟』9月14日掲載）である。このうち桑木の文章は日本語の原文が未詳であるが、佐野の方の原文は大正八年八月に雑誌『解放』に掲載された『労働運動の指導倫理』であろう。この二篇は演劇とは無関係な共産主義系の論文であり、果たして陳が演劇のために日本に留学したのか疑問が残る。1919年には他に

『誰が主人か』という小説を、翌年1920年には『良心』（5幕劇）、『英雄と美人』（5幕劇）、1921年には『幽蘭女士』（5幕劇）を執筆している。

## 2. 民衆戲劇社（1921年5月）とアマチュア演劇の提唱

帰国後の陳がその活動を開始したのは、1921年5月に組織された民衆戲劇社においてであった。同社は中国初の本格的な新劇雑誌『戲劇』<sup>(7)</sup>を刊行した。朱双雲の『新劇史』（新劇小説社 1914年）によれば、民衆戲劇社の同人である汪仲賢はかつて文明戯で活躍し、演劇団体文友会や開明劇社、そして任天知の創設した演劇学校である通鑑学校に参加した人物である。辛亥革命時期には陳と同じ進化団にも加入した。汪仲賢は『時事新報・青光』副刊の柯一を通じ当時『小説月報』の主編を務めていた沈雁冰と知り合ったといい<sup>(8)</sup>、そこで新劇団体を立ち上げる案が生まれた。これが民衆戲劇社である。民衆戲劇社は「非營業性質であり、芸術的新劇を提唱する」という宣言にあるように、そのモデルとしてロマン・ロランの民衆戲劇を念頭に置いたものであった<sup>(9)</sup>。第1巻第2号において陳の「愛美的AMATEUR戲劇（即非職業的戲劇）」が掲載されアマチュア演劇を宣伝した。「我々の現在の演劇はどのようなものであろうか。“教化的な娯楽”といった立脚点から観察すれば、“演劇”と見なすには不十分ではなかろうか。良心ある見識者は、おのずと見てとれるであろうから、これ以上のことは言うまい。」<sup>(10)</sup> 陳のこの言葉には、当時の演劇即ち文明戯に対する不満が表れている。職業演劇で商業主義に墮落した文明戯には不十分であった「教化的な娯楽」という側面が当時の新劇には要求された。社会を教化、啓蒙する役割を演劇が担うことを期待されていたのである。その役割を果たす「教化的な娯楽」を実現可能とするのが教化された役者である学生により演じられるアマチュア演劇であった。

民衆戲劇社はその後、1922年1月に改組され、陳大悲は蒲伯英と新中華戲劇協社を組織する。これに伴い機関誌『戲劇』の編集を上海から北京に移転させている。徐慕雲の『中国戲劇史』（世界書局 1938年）によれば、

陳大悲が愛美劇を提唱した後、北京の蒲伯英と中華戲劇協社を組織し、国内の48団体の社員合わせて二千人以上が参加した。その勢力は甚だ広大であり、数年以上にわたり維持続けた。その上何度も公演を行い、脚本はみな陳大悲の自作であり彼が演出、上演も行った。例えば幽蘭女士、英雄と美人、良心等である。俳優の多くは清華大学、北京高等師範、北京女子高等師範の学生であり、その他各地各校でも陳大悲の脚本が上演された。当時女子

高等師範の『孔雀東南に飛ぶ』は出色であった。<sup>(11)</sup>  
とあり、陳大悲の提唱したアマチュア演劇と北京の学生演劇との関連性が指摘されている。陳と学生演劇の関連性については次節で詳細を述べ、本節ではまず陳の提唱したアマチュア演劇の由来について考察していく。

陳大悲がアマチュア演劇の参考としたのは、主に以下の3冊である。

- ① Sheldon Cheney, *The New Movement in the Theatre* (Mitchell Kennerley, New York, 1914)
- ② Emerson Taylor, *Practical Stage Directing for Amateurs A Handbook for Amateur Managers and Actors* (E.P.Dutton and Company, New York, 1916)
- ③ William Lyon Phelps, *The Twentieth Century Theatre* (The Macmillan Company, New York, 1918)

その他に4、5種の参考書がある<sup>(12)</sup>。陳の著作『愛美的戯劇』と上記の三冊を照合してみると、②のアマチュア演劇の実践書が中心となったことが判明する。「私はまず先に専ら『愛美的舞台実施法』(筆者注②の中国語タイトル)を訳そうと思う。なぜならこの書はアメリカ人の書いたものであり、中国の状況とは大いにそぐわない部分が多いが、人様の先進国の演劇書を基礎とするに如かず、中国人のために常識を注入し眼前の実用の書として編むのに比較的收穫があるからだ。よって書中では共通有用な理論及び方法を採用する以外は、その大部分は我が国の演劇界の現実状況に即して述べたものであり、その中には弊病あるいは無遠慮で人を貶める部分もあるが、どうか読者のお許しを冀うばかりである。」<sup>(13)</sup>と本人が述べるように、②の目次と陳の『愛美的戯劇』の目次を比較すれば、その章立てがほぼ同じであることが分かる。②の目次は全7章 (I. Introductory II. The Choice of a Play III. Organization IV. Rehearsing V. The Amateur Actor's A-B-C VI. Make-Up VII. The Stage and The Scenery) から成る。陳の『愛美的戯劇』は全8章 (第一章 概論、第二章 劇本選択の討論、第三章 アマチュア演劇社組織法、第四章 アマチュア演劇リハーサル法、第五章 演劇人必携の資産、第六章 アマチュア化粧術、第七章 アマチュア舞台とセット、第八章 結論) で構成されている。

結論以外の一章から七章までのタイトルは②と同じであり、②が陳の愛美劇理論の基本的な参考書であったことが指摘できよう。ただ内容面では②とは異なり、陳は中国の状況をふまえて論を進めている。

②はこの『愛美的戯劇』以外にも、陳が『戯劇ABC』（農報社 1922年）を執筆する際にも大いに参考としている。②の第五章であるThe Amateur Actor's A-B-Cをそのまま『戯劇ABC』という本のタイトルに使用し、②の第6章のMake upの各節を『戯劇ABC』の第十三章「化粧の方法」以下でも取り上げている<sup>(14)</sup>。

陳によるアマチュア演劇の提唱は、これら参考書に依拠する部分が多く、全くのオリジナルというものではない。しかし、先にも述べたが、この時期にアマチュア演劇を提唱したのは、文明戯に象徴されるように墮落した商業演劇に対する反省と、商業演劇に染まらない新劇を担う人材の育成が必要とされていたためだ。それを実現するためには、指針となる依るべき演劇指導書が不可欠であり、陳の『愛美的戯劇』はオリジナリティは薄いとはいえ、当時としては需要があり意義あるものであった。

では陳が考えるアマチュア演劇とはいかなるものだったのか。

「愛美的」という文字は、ラテン語のAmatorに由来し、意味は美を愛する人である。フランス語のAmateurの意味は芸術を愛しそれを生活の糧としない人のことである。（中略）凡そ自由にある種の芸術を研究する者を愛美的と言えよう、例えば愛美的写真家、愛美的彫刻家、愛美的画家の類のように。（中略）愛美的戯劇は、説明するまでもなく、アマチュアの演じる演劇のことだ。愛美的戯劇の相対する語は職業的戯劇である。どの国でも愛美的戯劇の出現は、職業的戯劇に対抗してのことである。<sup>(15)</sup>

と『愛美的戯劇』で語るように、陳にとってのアマチュア演劇は文明戯や伝統劇のような職業演劇に相対する概念であり、そして芸術のための演劇であった。そのため演劇を職業としない人間であるアマチュア演劇人が存在する場、アマチュア演劇を実践する場として、大学などの学校の倶楽部活動としての新劇団がふさわしかったのである。学生はアマチュア演劇の主導者となり、良き実践者であった。

### 3. 学生演劇活動と陳大悲の関係

陳は1921年ごろから北京各校（北京大学、清華大学、北京女子高等師範等）で演劇を教授していた。『農報』によれば1921年5月に清華大学の学生が『良心』を上演している。その後11月に民衆戯劇社を組織した後、李健吾、陳晴皋、封至模、何玉書、劭商隱等と北京実験戯劇社を組織し、「愛美劇」の提唱と実践を行った。

陳がアマチュア演劇の実践の場として学校演劇にどう関与していたのか、以下に北京大学との関係を中心にみていきたい。資料として『北京大学日刊』に掲載された記事を基にする。

1922年3月4日に「北京学界戯劇同志社草章」という記事がみえる<sup>(16)</sup>。「研究と実行の精神を以て、演劇芸術を向上させることを主旨とする」、「凡そ北京学界の演劇芸術に対し研究と実行の精神を持つ者は等しく社員資格を有する」、「中国未来の演劇を研究創造し、世界の高尚なる演劇の紹介と中国人の人生を一に合わせる」ことを職務とした戯劇同志社は総務部、劇務部、編集部の三組織に分かれ、発起人は徐廠隱、王汝、陳願遠の三名であった。

同月11日には、今度は「愛美の性質、実験の精神で、芸術の進歩を謀ること」を主旨とする「北京大学戯劇実験社簡章」<sup>(17)</sup>が掲載される。また20日になると今度は「平民劇社啓事」が掲載されている<sup>(18)</sup>。この啓事により「平民劇社」は「北京学界戯劇同志社」が改組され成立したことが分かる。連絡人として「北京学界戯劇同志社」の発起人王汝の名前を挙げてあることから両社の関連性は明確である。

3月29日になると、「平民学校啓事」として4月1日、2日の遊戯会の通知が掲載される<sup>(19)</sup>。遊戯会は校務拡充のクラス増設のための募金を行う目的で開催され、両日とも新劇の上演を行った。この啓事には「戯劇実験社」と「実験劇社」の名が併記されており、二つの団体の存在が窺える。また上演した新劇作品『母』『幽蘭女士』『愛国賊』『良心』はどれも陳大悲の作品であり、陳はこの公演の指導を行っていた。

この遊戯会の後、しばらく新劇関連の記事が無く、11月21日になると再び「戯劇実験社」の通知が掲載された<sup>(20)</sup>。この記事からは、戯劇実験社がしばらく活動をせず、また社員で住所不明の者の所在を尋ねる内容から、学生以外にも社員がいたことを示唆している。

戯劇実験社の通知はさらに23日にも掲載されている<sup>(21)</sup>。12月に開催される開学二十五周年記念公演で陳大悲のバントマイム作品『説不出』を上演するため、陳本人をメーキャップの主任として招聘したという。

陳はこの時期北京大学の戯劇実験社での指導の他、蒲伯英と共に人芸戯劇専門学校を1922年11月22日に開校している。入学試験を経て入学した学生は寮生（内班）と通学生（外班）がおり、陳大悲一人が専任教員であった。陳大悲との関係から、人芸戯劇専門学校の学生の中に北京大学戯劇実験社の社員もいたはずである。陳はこれ以降人芸戯劇専門学校の業務に専念していくことに

なる。

## 結論

本稿ではアマチュア演劇前後の陳大悲の活動及びアマチュア演劇の由来、アマチュア演劇の実践の場として主に北京大学での演劇活動との関連性を指摘した。陳のアマチュア演劇論は主に西洋の演劇書を参考にしたものであったが、それを中国の演劇界の実情に照らし合わせることにより当時の演劇活動を行う学生たちに受け入れられ流行した。民衆戯劇社の『戯劇』や新聞『農報』はアマチュア演劇論を世に広める役割を果たし、新劇運動を推進した。その後民衆戯劇社を継承した上海戯劇協社との関係性や、陳や蒲伯英の創設したアマチュア演劇を本格的に実践する場として誕生した人芸戯劇専門学校についても、稿を改めて論じたい。

(附記) 本稿は科学研究費助成事業「中国における学生演劇の系譜」(学術研究助成基金助成金(若手研究(B)) 課題番号23720087、2011年度)による研究成果の一部である。

## 注

- (1) 審承員とは中華民国期に各県に置かれた役職。県知事の管轄下にあり、民事刑事訴訟を担当した。
- (2) 蒲伯英(1875-1934)字を沚庵、本名を蒲殿俊という。四川省出身。1904年に官費留学生として日本に留学し西洋の政治学説に触れる。1908年帰国。民国元年には段祺瑞政府の内務部次長となり、1919年には北洋政府教育部長の職を辞し『農報』の編集長となった。
- (3) 「愛美的戯劇」は断続的に『農報』に連載(1921年4月20日-9月4日)され、翌年4月に北京農報社から単行本として出版された。
- (4) 上海劇院は1935年に開学し、学生数二十余名であった。教師として汪仲賢の他、人芸戯劇専門学校出身者の徐公美らがいた。(朱双雲『新劇史』p.166)
- (5) 陳は1927年ごろから映画事業に転身した。上海で明星会社の職員となったが、後に課員に降格させられたという。外交部での勤務後1930年に上海に戻り天一公司での職を得るが、文壇の調査という極秘使命を帯びていたともいわれる。(『文芸新聞』1931年37号「陳大悲落寞街頭」参照)。
- (6) 『滬声』(1936年5期)、『影與戯』(1937年27期)等参照。
- (7) 『戯劇』1921年5月31日上海で創刊。1922年1月より新中華戯劇社編集となり、



北京の農報社より刊行された。1922年4月30日第2巻第4号で傳刊。

- (8) 柳和城「“新劇健將” 汪優遊」(『歴史與人物』2007年12期 pp.39-40) 参照。
- (9) 『戯劇』創刊号には卷頭論文に沈澤民の「民衆戲院の意義と目的」を掲載し、ロマン・ロランの『民衆劇論』を紹介している。
- (10) 『愛美的AMATEUR戯劇(即非職業的戯劇)』序「編述の大意」(『戯劇』第1巻第2期附録 pp.3-4) 参照。
- (11) 『新劇史』 p.138。
- (12) 注(10) 参照。
- (13) 注(10) 参照。
- (14) 「第十五章 舞台問題」、「第十六章 セット問題」、「第十七章 衣装問題」「第十八章 照明問題」、「第十九章 楽屋常識」も多く同書に依る。
- (15) 「一、何を愛美劇と謂うか」(『陳大悲研究資料』 p.54収録)。
- (16) 『北京大学日刊』(以下『日刊』と略) 973号。
- (17) 『日刊』 981号。
- (18) 『日刊』 987号。
- (19) 『日刊』 994号。
- (20) 『日刊』 1113号。
- (21) 『日刊』 1115号。